

尾瀬ネットワーク通信

Vol 1 2. No. 3 2009年11月



目次	
50年前の遙かな尾瀬に隔世の感	1
活動報告	2
指導員養成講座 修了者レポート	4
尾瀬自然講座 エンレイソウ	6
お知らせ	6
事務局だより	6

50年前の遙かな尾瀬に隔世の感

～昭和30年の尾瀬パンフレットを発見～

理事長 永島 勲

私ごとで恐縮であるが、亡父の遺品を整理していたら昭和30年（1955年）の東武バス発行の尾瀬のパンフレットが見つかった。今から54年前の尾瀬登山の様子が鮮明に伝わってきて、大変興味深く読んだ。この珍しい尾瀬の登山パンフレットを紹介しながら今日の尾瀬と比較し、その移り変わりを追ってみたい。

時代背景と自然保護

パンフレットは二つ折りでA5版、表紙と裏表紙はカラー、中は2色刷りで3枚の写真（至仏山中腹から尾瀬ヶ原俯瞰、中田代、アヤマ平）も載っていた。池塘には大きな浮島があり、アヤマ平には木道がなく荒廃する前の高山植物の生い茂った様子が読み取れた。

昭和30年は戦後の混乱した世相も落ち着きを取り戻し、白黒テレビや電気洗濯機が普及し始め、国家公務員の初任給は8,700円の時代であった。

尾瀬は昭和28年に特別保護地区に、昭和31年に天然記念物に指定されている。カラー刷りのパンフレットの表紙には赤文字で「尾瀬の自然美はあなたの手で護られる」とあり、中開きの尾瀬ヶ原俯瞰写真には「尾瀬の生命である植物を愛護しましょう」と太文字で書かれている。この時代の民営バス会社の登山パンフレットに自然保護の言葉が載っていたことに驚きを覚えた。やはり尾瀬は日本の自然保護運動の発祥地と言われるわけであろう。

登山口へのアプローチ

尾瀬の玄関口となる沼田駅までは上野駅から汽車で3時間30分、運賃は300円。登山には夜

行列車の利用が多かった様である。【特急で2時間05分、乗車券2,520円、特急料金1,300円】

（注）【 】内は平成21年度のデータ

当時の群馬県側のメインルートは大清水から三平峠を越えて尾瀬沼へ下るコースであり、一ノ瀬までは車道でなく沢沿いの山道であった。沼田駅～大清水間はバスで3時間、200円。【1時間35分、2,200円】

戸倉～鳩待峠にはバスはなく、8.8軒、徒歩3時間30分とある。この距離からすると今の車道とは異なる近道があったのかもしれない。



【54年前の東武バスの尾瀬パンフレット表紙】

尾瀬ヶ原へのルートは富士見下から富士見小屋経由で見晴、龍宮、山の鼻へと3本のコースがあった。

また、鎌田～丸沼温泉間はバスで1時間30分、70円。丸沼温泉からは今は廃道となった四郎峠(1820m)を越えて大清水へ抜ける登山道（徒歩4時間30分）が利用されていた。

一方、栃木県側からの入山は、浅草駅～東武日光駅間は特急で2時間15分、準急で3時間7分。

【特急で1時間54分】 東武日光駅からは路面電車（*）またはバスで馬返へ、馬返からバスまたはケーブルで中禅寺へ、さらにバスで湯元温泉へと、乗り換えも多く日光駅から1時間40分もかかった。湯元温泉からは徒歩で金精峠(2020m)を越えて丸沼温泉へ向かった。

正に当時は“遙かな尾瀬”であったと思われた。
*路面電車（日光軌道線）は昭和40年に第2いろは坂が開通したことにより昭和43年に廃止。その2年後に馬返のケーブルカーも廃止された。（つづく）

活 動 報 告

シカ防除対策観察調査（奥鬼怒林道）

群馬側担当理事 清水博之

- 1、調査日：7月11日（土）曇、8:00～14:00
- 2、場 所：奥鬼怒林道（大清水～彦之丞橋）
- 3、調査概要：環境省は尾瀬のシカ防除対策として昨年秋、日光方面からとみられるシカの侵入防止対策として奥鬼怒林道（大清水～栗山村4.6Km）沿い約3.7Kmにわたり防除ネット柵を設置した。

このたび、この実態について調査をした。

設置場所は、大清水から奥鬼怒林道に入り一の瀬橋先から小淵澤橋手前までの林道沿い等 3.7Kmのシカの通り道と思われる場所で、フェンスの高さは約2.5m、ネットの素材は細い針金入りの合成繊維でシカの衝撃に柔軟性を持たせたものと思われる。しかし、ネット際にシカの死骸を見た人の話によると、ネットに雄シカの角が絡むなどしてネットが破れるそうである。設置後まだ2年未満であるが、積雪等の影響もありネットの破損箇所はかなり多く見受けられた。定期的に巡回するなどして、補修が必要と見られる。



地元の新聞によると、これまで35頭を捕獲し、3頭に発信器を付けてシカの移動や行動を調査しているとのこと。なお、所管は片品自然保護官事務所（環境省）

- 4、参加者：伊藤、大山、亀山、坂本、清水、永島、深山

平成21年度 指導員養成講座

指導員養成講座担当理事 前田佳胤

平成21年度尾瀬自然保護指導員養成講座は、東京での室内研修及び現地研修とも当初予定されたスケジュールで無事終了し、6名の新指導員が誕生しました。

今年度の現地研修は昨年と同じコース「尾瀬ヶ原」「尾瀬沼」双方を歩き、変わりつつある「尾瀬」また「負の遺産」を体感しました。受講生の皆さんはそれぞれ思いをもったことと思います。

- 1、実施日

室内研修：平成21年7月25日（土）

東京・「ジャンダルム会議室」

現地研修：平成21年8月21日（金）～23日（日）

★第1日目 鳩待峠 → 山の鼻 → 竜宮 → ヨッピ橋 → 東電橋 → 赤田代 → 見晴
至仏山東面登山道の荒廃状況、池塘の底（泥炭層）が剥がれ浮き上がり裸地化してきている様子、湿原乾燥の指標ともいべきアブラガヤ等のイネ科植物の状況、シロツメ草、オオバコ、クレソンの群生等の外来植物の分布などを観察しました。

★第2日目 見晴 → 白砂峠 → 尾瀬沼 → 三平峠 → 大清水

沼尻付近の負の遺産、尾瀬沼の取水口や出水口、元長蔵小屋裏の護岸工事の見学や問題点を研修しました。

★第3日目 宿舎の一仙でまとめと修了式を行い、今年度の養成講座を終了しました。

- 2、宿 舎 見晴「原の小屋」 戸倉「一仙」

- 3、受講生（アイウエオ順、敬称略）

岡田 岳（栃木県）・鹿野キミイ（神奈川県）・

小鮒 守（群馬県）・高田順子（東京都）・

松澤 登（千葉県）・松村一徳（茨城県）

- 4、講 師 永島 勲、磯部義孝、前田佳胤、

福島側 研修活動 講演会&植物観察会

福島側担当理事 円谷光行

- 1、日 時：8月22日（土）17:00～18:30

- 2、講演会主題：「檜枝岐村の歴史と尾瀬」

- 3、講 師：檜枝岐村文化財調査委員長・檜枝岐
歌舞伎花駒座副座長 星 長一氏

- 4、会 場：ひのき屋

私たちの尾瀬における自然保護活動を支えるうえで、檜枝岐村の歴史の始まりから今日までの村民の暮らしや生活文化・産業を探るとともに、高山地帯の豪雪の中での過酷な生活、住民と尾瀬とのかわりから何を築き上げてきたかを知り、これからの保護活動に役立てる目的で開催しました。講師の星氏の父は檜枝岐生まれの方で母は会津若松から看護婦として働いていましたが、縁があって檜枝岐村で結婚。稗や粟、狩りなどの自給自足の生活が当たり前の日々で、今の食生活と比べられなく厳しい山村での生きた姿を生々しく語ってくれました。星性（844年頃）・平野性（1185年頃）・橘性（1569年頃）がこの地に移り住み始めた時期は、生活のため沼尻川から尾瀬ヶ原までの川沿いでのイワナ捕りのための段小屋坂沿いでの

移住生活。檜枝岐歌舞伎（1743年）は代々受け継がれて現在の「千葉之屋花駒座」に至るまでの苦労話。沼田街道での歴史的な出来事などを聞くことができました。

◆翌23日（日）は7:30～13:00まで「広沢田代・熊沢田代湿原植物観察会」を行いました。

広沢田代に行く途中の木道には、熊が水芭蕉の葉や実を食べた前後にした大きな糞があり、肝を冷やされました。熊沢田代湿原の休み場で昼食を取っていると、隣の夫婦から言葉をかけられ、以前に一寸した不注意なことでガイド的な人に酷い言葉で咎められたことが不愉快と話されました。私たち指導員としても、注意の仕方や言葉遣いなどに注意しなければならないことを改めて痛感いたしました。



【広沢田代への木道上の熊の糞】【地塘の水位がさがった】

- 5、参加者：磯部義孝、佐藤信良、坂本敏子、伊藤アケミ、清水博之、藤田隆美、亀山良吉、小林ミヨ、西山伸一、島田富夫、磯部たい子、金成政行、湯浅喜水、小林啓子、円谷光行

群馬側 第3回入山指導等実施報告

群馬側担当理事 清水博之

- 1、調査日：9月12日（土）曇、8:10～10:30
- 2、場 所：鳩待峠・尾瀬ヶ原
- 3、状 況：天気予報では12日は全国的に雨を予想したことが的中し、さらに次週が連休になることから、入山者はかなり少数であった。

ビジターセンターの情報では、秋の花であるエゾリンドウ・ワレモコウ・ウメバチソウなどが、高所では草紅葉の季節になったことが伝えられていた。

鳩待峠には、いつも頻繁に来るマイクロバスや乗り合いタクシーも少なく満席には至っていなかった。また、大型観光バスも一台も無かった。雨具の準備をしている入山者に積極的に声をかけ行動日程を聞いたり、雨中の登山者の注意、帰りの最終便の時刻などの確認をしてリーフレットを配布した。

午前11時、小雨の中シカ調査のため尾瀬ヶ原へ向かった。原では、外来植物の調査のための試験的な調査を行った。



- 4、参加者：伊藤、亀山、坂本、清水、千葉、永島、松澤

平成21年度第2回尾瀬ヶ原シカ調査

シカ調査担当理事 前田佳胤

- 1、日 時：平成21年9月12日（土）20:00（尾瀬ロッジ発）～24:30
- 2、コース：山の鼻～竜宮
- 3、調査方法：ライトセンサス法（約200m単位でライトを照射）
- 4、天 候：曇→雨
- 5、確認頭数：22頭
- 6、尾瀬ロッジ出発時には雨はやんでいましたが、調査を終える頃には雨に見舞われるという山の変りやすい天候の中での調査でした。

調査開始直後から林の中からはシカの鳴き声が聞こえていましたので、ライトの光が届かず姿は見えないものの林には多数のシカがいたと推測されます。また、個体が確認されたり、母鹿と一緒にと思われる小鹿の姿も肉眼で確認できました。

確認されたシカは22頭、これまでの調査結果と同様概ね山の鼻から竜宮に向かって右側の湿原・林に生息しているようです。今年尾瀬でシカの確認数が少ないのは、シカ防御ネットの効果や尾瀬の外側で猟友会が駆除活動を行ったことが要因ではないかと片品村猟友会では推定しているようです。大江湿原ではニッコウキスゲの花芽被害は昨年より少なく、例年に近い花が咲きました。大江湿原でもシカ捕獲のワナをしかけているので、シカが近づくのを嫌ったのかも知れません。



この調査で10年間行ってきたネットワークの野生シカ調査は一定の成果をあげ、節目を迎えました。先輩諸氏の労苦に対し感謝申し上げます。

- 7、シカ調査参加者：伊藤アケミ、亀山良吉、坂本敏子、鎮目安康、島田富夫、高田順子、千葉早苗、前田佳胤、松澤 登、松村一徳

福島側 第4回活動 添乗解説 資金カンパ活動 ～小淵沢田代湿原観察会～

福島側担当理事 円谷光行

1、日時：9月20日（日）～21日（月）敬老の日 7:00～11:00

2、場所：尾瀬御池～沼山峠（会津バス添乗）

3、資金カンパ活動金額：21,566円

前夜に檜枝岐村ひのき屋で「理事懇談会」が開かれたため、理事全員も添乗解説や資金カンパ・啓発活動に、通常通りの行程で活動を行いました。また、燧ヶ岳を目指して登るハイカーの中に安易な距離感や高低の捉え方で登攀したいとの相談が少しずつ増えてきたため、御池駐車場の奥の登山入口でリーフレットの配布や相談指導・啓発活動を今回から行うことにしました。この活動も活動参加者が少なくないできないため、会員の参加を期待いたします。

◆20日 11:00～小淵沢田代の観察会は初めての企画でしたが、紅葉が始まり秋の訪れがいち早く感じ取られました。

この観察会には、小淵沢田代は初めてと言う参加者が多かった。樹林帯ではオオシラビソ等針葉樹の倒木が多く見られました、雪と風のいたずらか樹齢百数十年の命を絶つ自然の力と新たに芽吹き自然の再生を繰り返す小さな命に感動しながらの登山道でした。小淵沢田代でもシカの被害とヌタ場は数多く確認することができた、この地は訪れるハイカーも少なくシカにとっては尾瀬地区で一番の安全地帯ではなかろうか、ここでも早めのシカ対策が必要である。草紅葉も大井湿原より標高が少し高いだけ色づきも良かった、天候も良く富士山までは見えなかったが遠く上州の名峰を望むことができました。帰りは尾瀬沼側に下山尾瀬沼ヒュッテ前にて休憩、無事観察終了しました。

4、参加者：永島 勲、磯部義孝、前田佳胤、椎名宏子、清水博之、高橋 喬、大橋文江、初谷 博、鎮目安康、小林ミヨ、松澤 登、加藤憲次、

鹿野キミエ、円谷光行

福島側 第5回活動 添乗解説 資金カンパ活動

福島側担当理事 円谷光行

1、日時：10月11日（日）～12日（月）体育の日 7:00～11:00

2、場所：・尾瀬御池～沼山峠駐車場

・スモウトリ田代湿原…湿原観察会

3、資金カンパ活動金額：13,750円

今年度最後を飾る活動は朝から雨に遭いましたが、皆元気よく活動の7つ道具をセットしてハイカーヘリーフレットを手渡し、添乗解説スタートです。シャトルバスの出発間もなく、日本の中でここだけという車窓から見下ろすことのできるブナ原生林、ブナ平の景色を見られる絶好の場所（見晴）に、会津バスの運転士が一時停止をするその瞬間、ブナの黄葉の美しさと雄大な自然に驚き「ウオー」と言う大きな歓声はその度にあがります。添乗解説しているわれわれにとって、活動の苦勞が癒される一瞬でもあります。

◆12日 11:00からの観察会は大杉岳を予定していましたが、天候不順のため御池ロッジ裏にあるスモウトリ田代湿原から整備された「ブナ平の道やブナ平自然観察教育林」を磯部副理事長のガイドで、秋でなければ観られない山野草や樹木の特徴などを多く観察することができました。

★資金カンパについて報告いたします。報告以外に福島県側で磯部副理事長が尾瀬ガイドを2回依頼されたときに行った資金カンパ総額は24,370円です。今年度の資金カンパ合計金額は104,286円となりました。

4、参加者：磯部義孝、高橋 喬、初谷 博、坂本敏子、伊藤アケミ、小林ミヨ、藤田隆美、松澤 登、加藤憲次、鹿野キミエ、円谷光行（一般参加者）：高橋義彦、川前範子、

指導員養成講座 修了者レポート**指導員養成講座に参加して**

岡田 岳

研修では大変お世話になりました。私は現在作業療法士の養成所（専門学校）で教員をしておりますが、授業の一環で、毎年学生を連れて1泊2日で尾瀬に宿泊学習をしています。そんな中で、学生が尾瀬の自然に目もくれず、ただただ「辛い」

「なんでこんなに歩かないといけないの？」などとボヤクことが最近増えてきています。どうしてなんだろう？まずは興味を引かせることができないのだろうか？と考えたときに、私自身も尾瀬の歴史や自然の生い立ち、尾瀬の現状など知識が不足していることに気づかされました。そんなことが養成講座に参加しようと思ったきっかけです。

感想文

松澤 登

教員になる前、精神保健の臨床現場で働いてきた私にとって、「自然と人間の関係」特に「人のこころと自然」との関係は、非常に密接な関係であることを痛感しているからこそ、勉強しなければいけないと思ったからです。人と自然との関係についてピンと来ないと思いますので説明いたします。

本来「自分」とは「自然（じねん）から分かれたもの」という意味です。

大宇宙との一体感にある状態を「自然（じねん）」と言い、その自然から分離して、個別意識にいる状態を分離感といい、自然から分かれたという意味で、「自分」と言います。ちなみにその「自分」はさらに「自己」と「自我」に分かれます。「自我」とは、心との同一視の状態のことであり、つまり、自我には、汚れが一杯であり、そのことに気がついて見つめるものが、自己になるわけです。その自己を実現させることを自己実現と言います。自我の中を浄化すれば、本来きれいな無色透明のガラスが現れてきます。色々な経験や勉強したことなどは自我に蓄積されます。本来の自己を現すためには、ガラスに付着したものをふき取り自我を滅却する必要があります。だからこそ（宗教的な話になってしまいますが）、古代の先哲たちは、自我の内部を浄化するために、苦行を行い、掃除したのです。ですから、自然を大切にしないと私たち自身の心も浄化されないのです。

研修中に観察された、尾瀬の「負の遺産」いわゆる「ゴミの処理問題」などの現場を実際で見ると悲しく感じます。本来自然から生まれた私たちを、私たち自身が傷つけそれを崩壊しようとしている現状、自然が壊れることで「生態系」も崩れてしまっている・・・。「少しくらいだったら・・・」という人間の欲動が、今の尾瀬の現状（自然破壊などの諸問題）をもたらしてしまっていることを直視し、「今これから・・・どうするか?」「私にできることは何か?」を常に考えていきたいと思えます。

今回学んだ事を、後世に伝える方法の一つとしても学生一人一人に「尾瀬の素晴らしさ」「自然保護の大切さ」そして「上面だけに惑わされるのではなく、隠れた部分にも目を向けること」の大切さを今後も続けていきたいと思っています。

最後になりますが、お忙しい中ご指導して下さいました講師の方々、研修にご一緒させていただいた受講生の皆様に心より感謝申し上げます。皆様に出会えたことに感謝いたします。

尾瀬の自然活動に参加する動機は極めて単純なもの、尾瀬の湿原が鹿によって荒らされているので夜間鹿の頭数調査を行っていると言う話を聞き経験したい、それも面白そうだからが始まりであり、それが指導員養成講座参加へのきっかけである。養成講座の座学で「尾瀬の自然とその保護」を学び、実地研修で温暖化による裸地化、鹿による湿原の荒廃、外来植物の侵入などの現状説明を受ける。単独で尾瀬を歩きまわっていたときには、成り立ち、温暖化、鹿の食害などが起きていたなど全く関心がなかった。尾瀬を訪れる楽しみは雪解けとともに咲くミズバショウ等々季節ごとに咲く高山植物を愛でる旅であった。

講師に案内され見せられた「ゴミの山」中身は空き缶・空きビン・アルミ箔・プルトップ等々、この中にかつて自分が捨てたものも含まれているのではないかと思うと、複雑な気持ちで一杯である。ただ山小屋のゴミ箱にまったく気にせず捨てたもの、今日目の前にしたときの驚きとショック・・・よくも人目につかないところにゴミ捨て場を・・・当時としてはこれが当たり前であったかも知れない。

尾瀬の自然保護活動に参加して初めて知った幾つかのこと、かつて自分が何も知らずにただ漫然と綺麗、美しいと時を過ごした時、既に破壊が起きていたのだ。今日学んだ自然保護の大切さを訪れる人達に少しでも多く伝えられるよう、努力していきたい。

指導員講座参加感想文

小鮎 守

講座に参加することになり、数十年ぶりの鳩待峠越えの私ですが、子供の頃にあの夏の思い出の唱歌を歌いながら父に連れられ尾瀬ヶ原を歩いた時からもう何回この尾瀬に来たのだろうと思い巡らしています。今こうして私が山好きになったのもこの尾瀬がきっかけだったのかと思います。また私が自然保護に関心を持ったのも尾瀬の自然保護の歴史を知ったことによります。あの懐かしかった尾瀬も今回訪れてみてあまりにも人口物にあふれ、外来植物のはびこり・尾瀬沼の消えた地塘。尾瀬沼に隠されたごみの山、人の踏み荒らしによる自然破壊、等考えさせられる問題が山積みです。こんな尾瀬を昔のようには行かないまでもこの自然を大切にしていきたい思いでいっぱいです。

皆様ありがとうございました、これからもよろ

しくをお願いします。

※今回未掲載の養成講座修了者のレポートは、次回以降に掲載します。

～尾瀬自然講座～

尾瀬の植物（４）

林床にひそかに咲くエンレイソウ（延齡草）

ユリ科（多年草）

日本に生育するエンレイソウの仲間は雑種を含めて8種類あり、尾瀬にはエンレイソウ（タチアオイ）とシロバナエンレイソウ（ミヤマエンレイソウ）があります。どちらも沖縄を除く日本各地、カムチャツカ、中国からヒマラヤ東部、北米まで広く分布し、山岳地帯から亜高山地帯のやや湿った林下に生育します。

両種とも太くて短い根茎があり、高さ20～40cmの茎を2～3本立ち上げ、茎頂に菱形・広卵形の特徴ある大きな葉が3枚輪生し、葉の中心から3cm程の花柄をつけ横向きに花をつけます。

※エンレイソウは、紫褐色のがく片3・雄しべ6・球形の雄しべ1よりなり、花柱は3裂、花弁ない。実は1cm位の液果で青紫色又は黒紫色。がく片は秋まで残る。

※シロバナエンレイソウは、緑色のがく片3・白色の花弁3・雄しべ6・円錐形の雌しべ1からなり、花柱は3裂する。果実は1.5cm程の液果で緑色、白色の清楚な花は大変美しい。



エンレイソウの仲間は、昆虫による他家受粉だけでなく自家受粉でも実を結ぶ。果実は8～9月にかけて完熟すると地上に落ち、一部は動物に食べられ、種子はアリによって運ばれる。種子にはエライオソームというアリの好物である付属物がついており、それを目当てに運んでくれます。10月には地上の本体は枯れるが、地下では来春にそなえて芽吹き準備をしています。

和名の由来は、古来アイヌではエマウリと呼び、それが変化してエンレイとなったとする説。根茎が民間薬として胃腸病等の薬用として利用されたことによるものなど諸説があります。古文書には、延齡草・延命草・延年草等と記されています。

参考資料…野草大図鑑、牧野新日本植物図鑑、原色高山植物図鑑、フィールドウォッチング：北陸館、野草の名前 山の植物誌：山と溪谷社、野草図鑑：保育社、野草図鑑：講談社
(深山美子)

== お知らせ ==

《第11回尾瀬フォーラム》

- *開催日時：12月18日（金）14:00～16:30
- *開催場所：高崎シティギャラリー・コアホール
- *テーマ：「美しい至仏山を未来に残すために～至仏山保全対策を考える」
- *主な内容：（１）基調講演 小泉武栄様
（２）会場との意見交換会

*参加費：無料

参加申し込みを、財団ホームページで受け付けています。国立公園特別保護地区内の登山道付け替えの問題を抱えています。是非ご参加ください。

《訃報》

元尾瀬の自然を守る会代表の内海広重氏が、11月19日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。葬儀の日時・場所は、下記です。

*日時：12月20日（日）13:30より

*場所：沼田 三東メモリアルホール セリオ
沼田市薄根町 3522-1 (☎ 0278-30-5380)

なお、ご遺族のご意向で葬儀は新生活（香典は2

千円以内）で執り行われます。

《セデイナカード》

セデイナカードの規約が12月1日より改定されましたので、会報に同封しました。

事務局だより

- ① 9月 みどりの地球防衛基金へ助成金申請
- ② 10月 損保ジャパンへ助成金申請

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

Vol.12 No.3号 2009年11月20日 発行

発行人：永島 勲

編集担当：鎮目 安康

Web担当：島田 富夫

〒100-0014

東京都千代田区永田町 2-17-5-203 (株)SEC 内

電話 03-3581-0321 / FAX 03-3581-2178

Web : http://www.geocities.jp/oze_net/

